

学校と地域の新しい連携

ーコラボレーションの可能性と課題ー

講師：大阪市立大学大学院 木原 俊行 助教授（当時）



※この時の公開研修会では、講師の木原先生はプロジェクターで説明用スライド（パワーポイント）を投影してわかりやすく説明を行われ、平成15年度事業報告書にもそのスライドが掲載されておりますが、写真等が多用されておりますため、このページでは削除しております。

1. はじめに

本日お集まりいただきました「はぐくみネット」関係の方々に、私なりに「学校と地域の新しい連携」というタイトルでお話をさせていただきたいと思っております。すでにご紹介がありましたが、私はどちらかといえば学校現場の先生方と関わりを持ち、学校教育の立場から研究を進めています。「総合的な学習の時間」（以下、総合的な学習と記述）の創設をはじめとして、学校と地域との関わりは増すばかりだと思います。いろいろな学校で授業を見せていただきますが、もうすでに半分くらいの総合的な学習の授業は学校の先生だけでやっていません。いろいろな地域の方に来ていただいて子どもたちと関わりを持っていただく、そういうことが総合的な学習でも教科学習でも行われています。ですから、学校教育と社会教育の接点は増えるばかりですが、今、学校で具体的にどのようにして関わりが大きくなっているのか、このことをお話したいと思っております。コラボレーションという言葉は、まだ皆さんにあまりなじみがないので副題にしたのですが、これは異質なものが交わり合って新しい形を生み出していく、そういう意味だと思ってください。学校と地域というのは考え方とか持っているものが違うけれど、それだから両者の交わりは価値があるということです。むしろ、同じものだったら別にいっしょになる必要はないわけで、立場が異なったり、考え方が異なったりしているものが葛藤を経て交わり合った時には、子どもの成長に対して非常に大きな力を持つこととなります。こういう考え方が大切だと思っておりますし、すでにいくつかいい事例をつかんでいますので、それを基本的な軸にすえながらお話をさせていただきます。

今日の話は4つのパートに分かれます。最初のパートでは、コラボレーションの考え方を取り入れた学校と地域の新しい関係の原則について、3点ほどお話をさせていただきたいと思っております。

2つめのパートでは、学校と地域のいい関係が何に結実すべきなのかということについてお話をしたいと思います。これはいろいろなところで花が咲けばいいとは思いますが、学校に今一番期待されていることは学力向上だと思います。ただし、ここで学力向上というときの学力は、高校入試をくぐり抜けるというような狭い意味での学力ではありません。私たちは「総合学力」ということを考えていて、それは「学びの基礎力」、「教科学力」、そして、「生きる力」という3層に及ぶものと考えています。そういう全体としての学力の育成ということに対して、責任を負うとすれば、実はもう学校のパワーだけでは不十分です。今日は学校の先生方と地域の方々が席を同じくしておられると思いますが、学校の先生方にとってこの学力向上がいかに深刻な問題であり、それだからこそ、地域の方々の協力や参加貢献がどれほど期待されているのかということについてお話させていただき、次に、学校側から見て学校と地域との連携が学力向上に結びつくということの仕組みについてお話したいと思います。

3つめのパートでは、2つめのパートで述べた、学校と地域のいい関係が何に結実すべきなのかというものの具体的な展開として、まず、教科学習を取り上げます。教科学習は先生方に任せておいて、それ以外の総合的な学習と特別活動の範疇の学校行事だけ地域が学校と結びつくというのも、一つの考え方もかもしれませんが、もったいないと思います。また、今の深刻な学力問題からすると、本当にいろいろな方の知恵と力を結集しないと、子どもたちの学力向上には結びつきません。ですから私は教科学習においても地域の方の力、あるいは家庭や保護者の方のエネルギーを学校に持ち込んでいただきたいと思います。試行された取り組みのよき成果を確認することができますと思いますので、3つめにそのお話をしたと思います。

4つめのパートで、総合的な学習における連携の可能性と課題についてお話します。大阪市や他の地域でも確認されているように、総合的な学習は地域の力をお借りしないとできない、学校だけでは進められないものとわかってはいます。ただ、安易にやると学校と地域のいい関係を壊すことにもなりかねません。残念ながら、そういうケースをたまに目にすることがあります。注意を喚起するという意味で、もう一度、総合的な学習における学校と地域の連携の理想像と課題についてお話をさせていただきたいと思います。

2. 学校と地域の新しい関係

まず、学校と地域のコラボレーションの原則についてお話したいと思います。「対等・互惠」というキーワードを使いたいと思います。どちらかがどちらかにおんぶに抱っこにならないようにということです。はぐくみネットではそんなことはないと思いますが、時々、学校の方が無理をいうケースとして、いろいろな行事があるたびに地域の方の力を借りて一生懸命働いてもらい、子どもたちの体験を成立させているというケースがあります。学校の先生でもできることなのに、地域の方のお気持ちに甘えているケースを目にすることもあります。逆に地域の方から学校の先生に対して、「子どもたちを何とかフェスティバルに出してください」、「先生方も参加してください」という申し入れが年間何度も続き、子どもも教師も疲弊しているという話を聞くこともあります。長い目で見て考えればいいことで、一回一回の行事や取り組みがどちらにとっても完全に同じ分担ということにならなくてもいいとは思いますが、ある程度対等互惠という原則を守っていかないと長続きしません。押し付けの連携だとどうしても相手がだんだん嫌になってくるということがあります。一回一回はなくてもいいけれど、年間何回か交わりがあった時に、両者にとってのメリットがあり、それを両者が確認できる、享受できるということになってほしいのです。

その際は、それぞれ立場が異なるということが前提になっているわけですから、片方で当たり前になっていることが、別の方では通用しないということもあります。だから、その間を取り持ってくれる方の存在が大事になります。このことについては、はぐくみネット事業は調査研究事業の時から、コーディネイターを設定していますが、この仕組みは大変すばらしいものだと思っています。もし、間に窓口となって双方の思いを伝えるコーディネイターがいなくてこの事業をスタートさせていたら、うまくいかなかったのではないかと思います。

学校の先生方の専門的な言葉は地域の方にはわからないことがありますし、地域にとっての取り組みの重要性が、その地域に住んでいない教師にとっては実感できないことがあるかもしれません。そのような時にコーディネイターが間に入ってうまく問題を整理し、双方の思いが通じるようなコミュニケーションに直していくことができるのは非常に重要なことです。また、市の事業ですから当然といえば当然ですが、協議会という形式をとって組織化されていることもよいことだと思います。地域連携

を大事にしている教員が学校にいる間は、大変華々しく活発に連携が進んでいくけれども、中心になっていた教員がその学校を去ってしまうと、もうなんのことかわからなくなってしまうということにもなりかねません。そういうケースは少なくありません。協議会という形式をとっていると、中心となっている人が去っても記録が残り枠組みが継承されていくようになりますので、大変心強いと思います。コーディネイターという窓口になるキーパーソンを設けていること、そして、あまり硬くなりすぎない程度の組織化がされているという点で、この連携の原則の1については、はぐくみネット事業では言うことなしだと思います。

原則の2番目ですが、「葛藤と妥協」ということです。これがなかなか難しいです。ある取り組みについていっしょにやろうという話が芽生える、そこからいろいろと相談をしていくと、ある時、すれ違いが起こってきます。それが勝負の分かれ目で、勝負というよりは岐路に立つわけですが、私はそこでもめていいと思っています。先生方はこういう活動が子どもの成長にとって一番いいと思う、しかし、地域の人々にとっては、そんなに規制をしないでのびのびやらせた方が子どもはうれしいのではないかと素朴に感じられる。これはどちらも正しいです。例えば、地域のお祭りのプログラムを考えることがあったとします。先生方はそれも教育活動の一環だから、きちんと評価もしなければいけないと当然思われるわけです。でも、そういうと足取りが鈍くなるから、もっと子どもの発想で自由にやらせたらいいんだと保護者や地域の方は思われる。それぞれが真理なのです。ですから、いったんもめてみるのが大事だと思います。けんかをするくらい、胸ぐらをつかんでもめるくらいになれば、むしろそれでいいのではないかと思います。皆さんの顔を見ていると、やらなかったけどそういう気持ちになったことがあると感じられますが、間違ったことではないと思います。そういう過程を経て、本音で語り合える関係が築かれるのではないのでしょうか。

もめた時の処理なのですが、私は先ほど両方とも正しいと言いました。これが大事なのです。どちらかの言い分が100%通るといえるようにはたぶんならないだろうと思います。先ほどのお祭りの話で言えば、お祭りのこの部分は完全に子どもの自由にさせるけれども、ある部分は学校の先生がきちんと条件をつけて子どもたちの活動を制限するというように、何割かは自由に何割かは規制をもってやるということになるでしょう。地域と学校が考え方や立場を異にするがゆえに、お互いもめた後、一生懸命語り合った後であれば、ある部分は引きましょう、相手を認めましょうというような関係性を持てるようにしていただきたいと思います。それが問題解決だと思います。問題を両方で共有した後、話し合いをしていく、時にはもめる、もめた後、最後はお互い譲り合っていく、こういうコミュニケーションのプロセスを、それぞれの地域で持っているかどうか少し考えてみてください。50校区は今年スタートしたばかりなのでそこまでいっていないかもしれませんが、おそらくこれからそういう事態に遭遇することがあると思います。最初はお互い本音で語り合い、どうしても折り合いがつかないことは、それぞれが少しずつ譲り合うという姿勢を堅持していただきたいと思います。

3つめの原則は「ネットワーク」ということです。コーディネイターが間に入り、学校と地域が連携を進めていくわけですが、その輪がもっと他のところに広がっていくほうがいいと思います。本事業は教育委員会がバックアップをし、時にはリーダーシップを発揮しながら、各地区の取り組みを盛り上げようとしています、その姿勢に敬意を表したいと思います。研修会を開くことから始まって、微にいり細にいりいろいろと配慮しておられる。そういうことが、はぐくみネット事業成功のある部分を支えているというのは、私がいつも感じていることです。

先日、はぐくみネット事業の運営委員会が開かれ、そこでも話題となったことですが、中学校を巻き込んだほうがいいのではないかとともに思います。小学校区でやっていますが、小学生はやがて中学生にな

っていくわけで、小学生の時は地域と結ばれているのだけれど、中学校になったら知らないというわけにはいきません。どういう形がいいのか、私にも今明らかになっていませんが、やがて中学校の取り組みを巻き込む形になっていくほうが、回り道をするようだけれども最終的にはうまくいくのではないのでしょうか。

私も運営委員会のメンバーとして参画させてもらっていますが、私どもの大学とも組織的に連携できればいいと思います。私が所属しています大阪市立大学は、大阪市が設置者となっている大学ですから、私だけではなく教育学教室には他の先生方もいらっしゃいますし、それぞれの地域で取り組まれる文化的な活動などについて専門としている研究者の方もいらっしゃいますので、研究者の立場からこのはぐくみネットに対して関わりをもつことが、もっと拡充されていいと思います。

とにかく、学校と地域の密なつながりというのは、他のところとのつながりもあるほうが体力が付き、いろいろな考え方を吸収しながら成長できると思いますので、学校と地域の両者が結びついたら後は見向きもしないというようにはならないでいただきたいと思います。

各地域の結びつきが、連絡会議や研修会などで共鳴しているというのも非常にいいことだと思います。はぐくみネットは小学校区を単位として進めていくわけですが、それぞれの取り組みを持ち寄って、コーディネーターがこういう場で交流していくというスタイルも非常にいいと思います。ここでは、ぜひそれぞれの地域の取り組みをつまびらかにし、報告、公開していいところを吸収し合うようにしてください。うちでやっていることは秘密にして、よそには絶対に渡さないなどとは思わないでください。

以上、連携の原則の3点について、学校と地域が結ばれる時にこれだけは守っていただきたいということを私なりに述べさせていただきました。今皆さんのところで行われている取り組みがこの指標に合致するものであるかどうか、またお考えいただきたいと思います。

3. 学校が抱える今日的課題ー学力向上ー

学校と地域の結びつきが花開いてほしいということの重要なポイントの一つである学力向上について、子どもたちに地域で活躍する人材になってほしいという思いも含みながら、お話をさせていただきます。

資料5をご覧ください。私たちは学力を高校受験のテストが全部解けるということだけをもって考えてはいません。もちろんそれも含むわけですが、もっと広く捉えています。「学びの基礎力」とありますが、あまり聞かれたことがないと思います。教科の学力と生きる力は耳にすることが多くなったと思うのですが、「学びの基礎力」は私が大阪教育大学の田中博之先生と一っしょに持っている研究グループで考えている新しい概念です。聞かれたら、何だ、そんなことかと思われると思います。資料6をご覧ください。教科の学力にも生きる力にも効いてくるような基礎的な体験だとか、基礎的なスキルというものを意味しています。そう言っただけでは、まだわかりにくいと思いますので、具体的にすると資料7のように、例えば「豊かな基礎体験」となります。地域の自然とか文化に触れるという体験、これが直接体験です。本や新聞、今だとインターネットなどに接している回数やその関わり方、大阪市がやっているような図書館セミナーなどはメディア体験に関わってくるかもしれません。今の子どもは自主的には本を読みませんからこういう機会を増やしてやると、将来的に国語の力や知らない人と意見を酌み交わす時の発言力が身につくわけです。また、他者との支えあいや交わりとして、自分と肌の色とか性別を異にする人たちと交わるという経験を豊かにもっているかどうか、一っしょに遊んでいるかどうか、なども生きる力の育成に大きな影響を及ぼします。

次に基本的な生活習慣です。朝ごはんを食べるかどうかというようなことが、教科の学力に効いてくる

のかと、私は少し信じられない感じがして、学びの基礎力を考えるプロジェクトチームで会合を持っていた時に、現場の先生方に聞いてみたのです。すべての先生が「そうだ、そうだ」とおっしゃいました。やはり、朝ごはんを食べてくるかどうかというのは、子どもたちの狭い意味での成績にも、広い意味での学力にも相関関係を持っているようです。皆さんは、どう思われますか。今、けっこうなずかれています方もいらっしゃるのでは、そのとおりなのでしょうね。

資料6に戻ります。「学びを律する力」です。これは大げさなことではなくて、嫌なことがあっても我慢できるかどうか、その程度のことです。あるいは、しんどいと思ってもそれをある程度は続けられるかどうか、その我慢強さみたいなものを含んでいます。

「自ら学ぶ力」は自己学習能力といわれていますが、言われなくてもノートをとるとか、わからない言葉があったら先生が指示しなくても辞書を引いてみるとか、そうしたことです。だから、基礎力と呼んでいるのですが、これはどこかの教科で育てるというものではありません。総合的な学習で地域と華やかに子どもたちが交わっている時に浮かび上がってくるような力でもないかもしれません。しかし、実はこうした力を家庭や地域や学校で意識して育てているかどうかというのは、教科の学力と生きる力に影響を及ぼしているということは想定できます。その想定をもとに、本年2月に全国何千人という子どもたちに調査をかけました。その結果がそろそろ上がってきたのですが、だいたい予想通りでした。子どもたちに学校や家庭でこの力に関わるような指導をしてもらっていますかということ具体的な項目にして子どもたちに問いました。やっている、やっていないということと、その子どもたちの基礎力、教科の学力、生きる力というものの連関関係をさぐっていったのですが、けっこうはっきりできました。大阪市の学校は1校だけ参加していましたが、私たちのねらい通り、予想通りでした。

嫌なことがあっても我慢してやらないといけないのだというような皮膚感覚は教師だけが口をすっぱくして言ってもだめです。教師はそういうけれども、家庭に帰ったら「別にやらなくてもいいよ」と保護者が言ったら、あるいは、子どもたちが嫌なことがあった時にそれを放り出した時に、地域の方々がそれを許しているようだ、たぶん子どもたちはそれでいいんだと思うでしょう。こういうことを大事にする精神というのは、学校、家庭、地域が一枚岩になっていないとだめです。そうでないと、子どもたちの中では先生の前ではそのふりだけをしてあげばいいし、家庭では甘えてもいい、地域での取り組みだったら自分のずるさを認めてもらえるというふうになってしまいます。このあたりの基礎力が養われていないことが、いろいろな社会的な事件を子どもたちが起こすようになりつつあることともどこかでつながっているのかもしれませんが、こういった意味で、皆さんはそんなことまで学力というのかと思われるかも知れませんが、学びの基礎力は大事だと思います。学校の先生にとっては、家庭でやってほしいという気持ちをお持ちかもしれませんが、しかし、さっき言ったことと逆のパターンもあるわけで、家庭では一生懸命言うけど学校では知らないというふうになっていたのでは、子どもたちの中にこういう力がしっかりと根付いていかないと思いますから、いろいろな場面で学校の中でもこれにあたることを鍛えてやらないといけないでしょう。

生きる力については、あまり説明の必要はないと思います。自分で問題解決の道を歩いていく力や、社会的な実践力というようなものです。この生きる力の育成に重要な意味を持つのが総合的な学習です。私は、小学校、中学校を通じて何百時間とある総合的な学習の時間の中で地域学習が繰り広げられる時、子どもたちが小学生であっても地域に貢献してほしいと思っています。先ほどから例に出しているお祭りだったら、子どもたちもその企画の一部を担って推進するとか、企画はできないけれども大人がやっている企画にのって子どもたちも新しい出し物を考えてみるとか、子どもなりに具体的に活動できることがあると思います。学校に来てもらってとにかく話を聞かせてもらうという一方方向のコミュニケー

ションではなくて、協働的な活動、共同作業などが目指されるべきでしょう。話を聞かせてもらうことに終わらない、協働的な活動ができる力を総合的な学習では育めると思うのです。ここにあげたことは、総合的な学習が生まれる前は大事だと思っていてもあまり培う機会と時間がなかったのですが、学校の中でこれをターゲットにする、つまり育成目標に掲げることができるようになってきました。地域の皆さんの協力が非常に重要なところです。

4. 新教育課程に期待される教科学力

さて、教科学力について少し説明させていただきたいと思います。資料9の丸の中に書いてある言葉は、学習指導要録という1年間の学習の記録を学校に残していくための公簿における教科学習の評価の観点です。関心・意欲・態度、それから思考・判断、技能・表現、知識・理解という4要素になっています。皆さんが日ごろ学習指導要録を目にすることはないと思いますが、最近では開示の請求をすれば、自分の子どものものは見ることができるようになってきています。学校の先生方はこの4つの観点を大事にして日々の授業に取り組んでいます。決して知識・理解だけではないのです。皆さんの中には、高校受験が大事だとおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが、国の教育の枠組み自体が実はこうなっています。学習指導要録の枠組みというのは国が決めることですから、現在、国の教育行政というのはこの考え方を踏まえて推進されているわけです。

また、仮に高校受験という現実があるから、知識・理解が大事だと思い、知識・理解のためだけにドリル学習だけを続けていたら、それで子どもたちの学びがうまく成立するかというと、現実的にはそうなりません。知識・理解が大事と思って、覚えろ、覚えろ、覚えろ、覚えろと念仏のように教師が唱えていたら、子どもたちが大事なことを覚えられるかということそうではありません。

資料9の右側を見ていただきたいと思います。例えば、伝統産業について学習する時、それに気候や地理的条件などが関連していることがわかると、同じ日本でも日本海側と太平洋側では、だからこんなに作られているものが違うんだということが腑に落ちるわけです。これは体系化ということですが、一個一個の知識を統括する論理を持たせた時に、子どもたちの知識は豊かになるわけです。そうすると、その枠組みを子どもたちに身につけてもらわなければならないわけですが、それは覚えろといってもできません。自分で発見するという過程を伴っていないと身につかない学力ですから、指導の仕方を教師たちは工夫しなければいけないし、現在それに取り組んでいるわけです。知識が大事だと思われる保護者の方や地域住民の方がおられると思いますが、それはそれで認めていいと思います。ただ、知識伝達だけを学校でやっていれば子どもたちの学力が豊かになるかということ、もはやそういう時代ではありません。耐え忍ぶ力が強い子どもたちだった時には、覚えろ、覚えろ、覚えろ、これを解け、解け、解けと言われて我慢できたのかもしれませんが、でも、今の子ども文化はそうなっていません。もちろん、ある程度は我慢させることも先ほどの基礎力のところで述べましたように必要です。しかし、皆さんが若かりし頃と今の子どもでは、もはや文化が違います。インターネットを使ってなら自分は見つけられる、学べるよという子どもたちもたくさんいます。指導の仕方を変えていかなければいけません。その際に、実は皆さんの力が必要なのです。学校の教員も授業改善、授業改革に取り組んでいます。しかし、学校の先生だけでは、もはや子どもたちのトータルな教科学力を育成できません。新しい指導の仕方が必要で、それに対して皆さんができることが大きいということの後から具体的に述べたいと思います。

さて、資料10です。学力向上に向けた3者の分担や連携の重要性については先ほど述べました。先ほど自然体験などの話題を出しましたが、学校でも、林間学校、臨海学校などに子どもたちを引率していくことがあります。しかし、年に1回だし、そもそも行く場所も限られています。いろいろ事情もあ

るでしょうが、家庭でもそうしたところに子どもたちを連れて行けると思います。大阪にはさまざまな文化施設がありますので、これらを利用すればよいのです。仕事の都合で連れて行くことが出来ないという場合もありますので、そんな時には地域の方が企画するツアーなどがあれば非常によいと思います。

私は家庭での学びの基礎力の育成の一番大切なところ、一番原点になるところは対話だと思っています。子どもたちにとっては保護者が学校であったことを聞いてくれるだけでもだいぶ違うのですが、それさえもできていないと言われていました。今回調査してみて、やはりそれをやらなければいけないと思いました。子どもたちは聞いてもらいたいと思っているのです。その機会を渴望しています。忙しい中ではありますが、少しそういったことをするだけでも、それが基礎力に、そして基礎力が教科学力に、また、生きる力にというように発展をする可能性があるのですから、話を聞いてあげるといふことなど、やれるところから取り組んでいただきたいと思います。

学校で注目してほしいことは、一人一人の先生ができることと、学校全体で取り組まなければならないことがあるということです。例えば、習慣にあたる場所として「分からないところがあれば、辞書で調べるんだよ」というようなことは一人一人の先生で指導できます。しかし、子どもも中学年から高学年になると、知識・理解だけを取り上げて、学力に差がでてきます。それを一緒に教えていたら、ある子どもたちはただのお客さんになってしまうかもしれません。だから、小学校でも少人数指導とか習熟度学習を取り入れ始めています。それについて皆さんの意見はいろいろ分かれるところだと思います。「やはり小学校では、学級担任がいろいろな子どもを抱えながら、ファミリーとしてやっているのがいい、そんな側面を大事にしたい」と考えている保護者や地域の方がいらっしゃると思います。「いやいや、現実の学力の差を考えたらほうつはおけない、分けた方がいい」という考えの人もいるでしょう。私はその両方とも正しいと思っているので、単元や学習内容、あるいは学年に応じてそれらを使い分けたり、組み合わせたりすればいいと思います。さて、少人数や習熟度ということになると、一人の先生ではできないわけです。一人二役、三役をこなすことができる先生もいますが、二人目、三人目の先生がいるのにこしたことはありません。それは、校長先生や教頭先生がやるとか、加配（決められた教員定数以外に配置する教員）の先生の活躍があるでしょうし、皆さん方だって協力できるかもしれません。そうなれば、学校内外の調整や教えるための組織の調整が必要になるわけで、一人の先生の努力だけでは説明できないところがあります。学校として、そうした役割を果たす組織ができるかどうかにかかってきます。学校がやっていくことは、2つの視点で見てほしいと思います。つまり、「学校の先生の一人一人ができることを、きちんとやっているかという目」と「一人一人の先生ではもはやできない次元で学校が勝負しようとしていることを見る目」の2つの視点です。この2つの視点で学校の取組みを見てほしいと思います。

さて、資料 11 です。家庭や地域にお願いしたいこととして、「子どもたちの話を聞いてあげてください」「特にほめてあげてください」ということをもう一度言いたいと思います。それから、今、物づくり教育というのが必要とされています。小学校の中では図画工作、中学校では技術でやっていくのですが、学校完全週 5 日制がスタートしてから、授業時数が少なくなってきました。各教科すべて授業時数が縮減ですから。ここにいらっしゃる方は、土曜日に学校で授業があった方が多いと思うのですが、皆さんの時の感覚とは違います。金曜日までしか授業がないわけですから、学校でできることは相当減ってしまいます。非常に忙しい毎日を教師と子どもは送っているわけで、物をじっくり作る時間をそう多くは確保できません。ですから、家庭や地域で物づくりをする機会があるのは非常に貴重です。

それから、「宿題やったの」と一声をかけるだけでも違います。やっていないからといってがみがみ言って、子どものやる気をなくしてしまうのも問題がありますが、「やったの」と聞くだけで自分を気

にしてくれていると子どもたちは感じます。その一言があるだけでも学習への意欲は随分違ってきますので是非やってほしいと思います。これは、難しいかもしれないけれど、実は一番成功しています。

今、学校の国語の授業の中で、保護者などに読み聞かせをしていただくことがあります。子どもによって興味・関心を持つ話が違いますから、そうした「応援団」は実に効果的です。教師は、何グループにも分けて読み聞かせをしたいのです。ある所で「ごんぎつね」を話して聞かせている時、別の所では「シートン動物記」をやりたいと思っていることがあるわけで、その部分に応援団がほしいのです。中には読み聞かせの専門家のような方がおられて、全員に聞かせて教師だけではできないほど盛り上げることがあってもいいと思いますし、いずれにしても、こういったところから教科学力の向上に、地域の方、保護者の方が協力していただくといったことが生まれてきています。これが一番成功しているし、数も増えています。

次に、学校行事です。現在、厳選するという方向で進んでいますが、数が限られているものについては、地域のやりたい行事をそこにかぶせて対等互惠でやっていけばいいし、おそらく皆さんもそうやっておられるのではないかと思います。

現在、学校の先生方は年配の方が多くなっています。改善されつつありますが、しばらくはこの状態が続きます。そうすると、どうしても情報機器の活用に及び腰であり、コンピュータが使えない、インターネットにどうやってアクセスしたらよいかわからないというケースも出てきます。「あなたが使えなくてもいいのですよ」といっても、壊したらいけないとか、子どもが怪しげなサイトに行ってしまったらどうしようと、どうしても不安を持ってしまいます。学校の中でも、得意な先生が得意でない先生を支える仕組みをとってはいますが、人数に限りがあるのでどうしても多くの先生が使うとなると対応しきれません。そこで、ここでも堪能な保護者の方や地域の方の力を借りたいのです。行政も地域のレベルでさまざまなサポートを展開していますが、大阪市には小学校だけでも300弱あるわけで、なかなか支援も行き届きません。そういった時に、ITボランティアというのが本当に必要とされていますし、関わっていただくとうごく大きな力を発揮していただけるのです。皆さんの中にも苦手な方がいらっしゃるかもしれませんが。その場合、地域の中の得意な方も苦手な方も子どもと一緒に学ぶといいですね。地域のIT学習会と学校の情報教育とがそこでオーバーラップすればいいわけです。

資料12の写真は、東京都八王子市の小学校の様子です。学級担任が一番右上の写真の右端にいます。これは国際理解教育の一環として英語活動を実施しながら、ITも活用するという生活科の取り組みです。NHKが放送している学校放送番組に小学校の児童が楽しく英語を学ぶ「えいごリアン」というプログラムがありますが、それを視聴した後、子どもたちはその番組で使われた表現を英語活動のアシスタントとして八王子市から派遣されているALTと一緒に定着させていきます。さらに定着させるために、NHKが作っている番組関連のホームページがありますが、この写真のようにそれを使って楽しくゲームをしながら、子どもたちは英語表現に慣れ親しんでいきます。ところが、この教師は全くコンピュータを使えません。そこでこのクラスの保護者の方や地域の方がITサポーターとしてやって来て、子どもたちがゲーム活動を楽しむ際に、エラーが出た時にはこうしたらいいというようにサポートしているのです。このようにして情報機器が使えない教師の授業でも、それを活用した非常に充実した取り組みが実現していました。もちろん教師はさぼっているわけではありません。子どもたちがつまづいた時には、英語の指導はその教師もできるわけで、「この表現はこういう意味だよ」と指導していました。この45分の授業は、授業者とALTと、保護者や地域の方が3人ぐらい来ていて、大変手厚い非常にいい英語活動の取り組みになったわけです。皆さんも、これくらいなら学校に行っても自分もできるぞと思われる方が多いのではないのでしょうか。

2月に行われた「はぐくみネットの研究発表会」でも、はぐくみネットのホームページを立ち上げているという報告がありましたので、学校の先生以上に得意な方やお好きな方がいらっしやると思います。ぜひともこんなところでお力をお借りできればいいと思います。もちろんお仕事との関係がありますので、それとの兼ね合いとかいろいろ難しい部分もありますが、学校が困っている大きな問題の一つに、このIT活用があるということ強調しておきたいと思います。

次に、教科学習に地域住民の方が参画する学習の事例を見てみたいと思います。小学校3年生・4年生で地域のくらしや歴史を学習することになっていますが、この学習の時に高齢者の方からむかしの暮らしの様子や大阪大空襲の痛ましい様子などを聞き取りさせていただくということがあります。また、大阪市はあまり自然が豊かではありませんが、地域の自然の変化などの実情をお話いただくといいと思います。理科や社会科では、地域の方に地域情報の提供者という役割を存分に果たしていただくことができます。大阪市も社会科などでは副読本を作っていますが、副読本だけではリアリティがありません。活字と写真で学んでいくよりは、生の語りで聞く方が説得力があるわけで、情報提供者としての存在は学習を大きく支える可能性を持っています。

二番目の役割についてです。補充学習の担当というと、地域の方がまるで教師と同じ立場を取るように思われがちですが、正確な表現をすればこれも先生方の応援団ということですね。先ほど述べたように、子どもたちには学力に差があるので、課題別の難しい課題に取り組んでいる子どもと、じっくり基礎的なものを行っている子どもを並行して一つの教室で指導したいと多くの教師は思っているし、実際にそれに取り組んでいます。こちらの子どもにはプリントを渡してこの問題をできるように言って、別の子どもにはそばに寄添うようにして計算までいっしょにして、というスタイルに、多くの教師が取り組んでいます。これは本当に大変なことです。そのプリント学習で子どもたちが丸つけをして欲しいと思う時に、皆さんがそれをしてあげるというだけでも、教師の肩の荷が軽くなります。そういう意味で、資料13には担当と書きましたが、応援・援助です。もしかしたら、私は英語が堪能という人がいるかもしれませんが、欧米諸国では教員免許を持っていない人が学習ボランティアとして教科学習に参画しています。そして、そういったボランティアの人の写真が学校の玄関に掲げてあります。皆さんのような立場でアシスタントティーチャーとして学校の教科学習に関わる人が学校のスタッフとして認知され、仲間として写真が掲示されているのを実際に目にしているのです。どうして日本だけが教科学習は教師の聖域として考えなければならないのか、いつも疑問に思っているわけです。現行の制度では授業をするには教員免許が必要になるので、教師と同じ立場と視線でやることはできませんが、それもいろいろと変化してきています。特別非常勤任用制度など国の教職員配置の枠組みは、弾力化、柔軟化の方向なので、教科学習は教師の聖域だという考えはだんだんと変わってきています。だから、皆さんができるのであれば、ここでも学校への関わりをお願いしたいと思います。

総合的な学習で学校と地域が結ばれ、成果があがることはもうわかっていますし、実際に成果も出ています。けれども、学校は総合的な学習ばかりやっているわけではありません。年間九百何十時間ある授業時間の中で総合的な学習は百時間程度です。残る八百何十時間は教科指導しているのです。そこでは結ばれなくて総合的な学習だけ結ばれるというのは、学校の先生と一部分だけで交わっているようです。果たしてそれでいい関係だと言えるのでしょうか。確かに学校の先生方も教科学習の部分は私たちに任せてもらってとっているところもあります。だから、皆さんがそこに関わっていくと言うと迷惑がられるかもしれませんが、そんなことを言っている時代ではないと思います。総合的な学習でも教科学習でも交われれば、子どもたちの全人的な成長という点からするとその方がベターだと思いますので、可能性を是非さぐって欲しいと思います。

豊中市の例を紹介したいと思います。子どもたちは、自分たちの作った作品を他者に伝えるというスピーチというかコミュニケーションの学習をしています。従来なら、子ども同士で発表会をします。教室の中で練習をするわけですから、発表の前に内容が学級の皆にはわかってしまって、新鮮味がなくなるのです。しかし、その日に地域の人に学校に来てもらうと、子どもたちも励みになるし、うまく伝わらない時にどうしてなのかと考えやすくなります。その日来ていただくだけでこれほど違ってきます。

兵庫県のある小学校の産業学習の例です。わが国の農業は、就業人口も減っているし生産高も減っている、どうもうまくいっていない。自分たちの地域の農業も同じようにうまくいっていない。しかし、日本の中にはうまくいっている地域もある。そういったことを踏まえて、教師が農業はうまくいっている地域に任せればいいのではないかという問いかけを子どもたちにしました。皆さんが子どもだったらどう答えますか。子どもたちは一旦そうなのかと思いました。要するに分業するというか、わが国の米作りの典型的なところである東北とか北陸に任せて、自分たちの地域は他の産業をすればいいというように関心が向きました。そこで教師は揺さぶりをかけます。このクラスのある子どものおじいちゃんに農業をしている人に教室に来て貰って、子どもたちがその方に質問するのです。子どもたちは「どうして農業をやめないのですか。私たちが調べたところによると農業するには不利な条件ですね。大規模農業はできないし、気候的にもあまり恵まれていないですね。それでもどうしてやめないのですか」と尋ねたのです。おじいさんは何と答えたのか子どもの気持ちになって予想してみてください。いろいろな考え方があろうでしょう。

(フロアーから)

○むかしから代々伝わってきた米づくりを大事にしたい。自分のところは無農薬のものを作りたい。

○米作りが好きだから。

「生き物が育っているのを見ながら、働くのが好きだ。稲は手をかければかけるほどちゃんと育ってくれる。たとえ東北地方に比べていろんな条件が悪くとしても、自分自身が自然に働きかけてやればきちんと植物の成長に反映される、それが好きだ」という重みのある答えが返ってきました。教師は無農薬など社会科として重要な視点を話して欲しかったと思うのですが、それはいろいろな資料で補うことができます。この人が語った第1次産業の基本的精神のようなことは、この人が言わなければ子どもたちは知ることができなかったでしょう。これは、教科の学力で言えば、関心・意欲・態度ということに多大なる影響を与えたと思います。皆さんの場合であれば、これを文化とか歴史に置き換えていただければいいと思います。その地域の人でしか感じられない熱い思いが、皆さんから伝えられることで子どもたちの目が開かれ、彼らの実感を伴った理解を育むことになるのではないのでしょうか。

今、学校の先生同士でも一人で教える仕組みを変えていこうとしています。学校ではティームティーチングであるとか協力教授という言い方をします。しかし、学校の先生方で結ばれていくだけでは、どうしても手狭であるし、発想が乏しくなってしまう。指導組織という教える人たちのチームというのは、水平的にも垂直的にも充実したほうがいいと言われていています。例えば、専門家として先ほど述べた農業をされているおじいちゃんや、ITサポートというような人たちと教師が結びついた時、大きな力を発揮するわけです。他にも、学習遅進児に特別な支援がいる子どもたちに対して、皆さんができることは決して少なくないと言われていています。高校生が小学生を教えることも構想されています。大阪市立大学の学生も大阪市のさまざまな学校にボランティアとして参画して、できることをやっています。私どもの学生ができるのですから、皆さんならもっといろいろできるはず。このような指導組織の広がりの中で、子どもたちの成長を少しでも豊かにしていこうという時代ではないのでしょうか。

これはある小学校で英語活動を実施している様子です。従来でしたら、英語活動といえばALTといって英語を母国語としている人と決まっていた。先程の八王子市の例では、それが少し緩やかになって、英語を母国語としない人でも英語が堪能ならいいと変わってきています。この資料のケースは、実は日本人の方から支援を受けています。日本人だけれども留学経験が豊富で、非常に豊かなコミュニケーション力があるので来て貰っているということです。この人は地域の人ではありませんでしたが、非常勤講師として採用されていました。大阪市も財政が厳しくなっていますので、300弱の小学校で英語活動しようと思った時に、すぐにALTをたくさん準備するとはいかないわけです。国際都市大阪に住んでいるのですから、子どもたちには英語に慣れて欲しいと思われる方が多いのではないのでしょうか。その時にやれと言うだけではなくて私なら何ができるだろうか、私自身はできないけれど私の知り合いにこんな人がいるよというように、ぜひ学校の先生方を助けていただきたいと思います。この他にも教科学習における学校と地域の関わりにはまだまだたくさんの可能性があるのではないのでしょうか。

5. 総合的な学習における連携の可能性と課題

すでに芽生えている総合的な学習などでの地域と学校との結びつきについて話をし、結びとしたいと思います。資料 19 です。小学校においては、地域を核にしないと総合的な学習は成長しません。なぜ地域かと言いますと、地域への愛着というものは教科学習ではなかなか育みにくいからです。それから、学力と言えらるかどうかわかりませんが、地域の方と関わることで子どもたちの対人的な力が強まります。次いで地域をフィールドとすることによって、自分自身しか手にしない情報を得る訳ですから、それが物事の調べ方、まとめ方、発表の仕方というようなことを工夫して子どもたちが学習を進めることにつながるなど、いろいろな利点が出てきます。

さて、学校の先生には、ゆとりをもって、往復作用のある交流体験を実現してもらいたいと思いますし、地域の皆さんにはそういった要望を学校に伝えて欲しいと思います。

このスライドは2年生の生活科の様子です。いいなあと思ったのは、地域の方に子どもたちが作り方を教えてあげているのですが、この前の場面では、伝統遊びや伝統的なおもちゃの作り方を子どもたちは地域の方から教えてもらっているのです。それを踏まえて、今度は子どもたちが自分たちが長けている科学おもちゃを使って、高齢者の方と一緒に遊ぶという機会です。人に教えるのが好きなので教えるだけでいいという地域の方がいらっしゃるかもしれませんが、こういう交流もあっていいと思うのです。単元というように設定しなくても、2年生の時は教えてもらうけど、6年生になったら地域の方にこんなことを教えてあげるといいうようになってもおかまわないと思いますし、単位やスパンはいろいろあっていいのですが、教えること学ぶことは表裏一体だと思います。このことをぜひ子どもと地域の方の関係の中にも体現してほしいと思います。このように取り組んでいる学校ほど交流が長続きしているし、来ている方の表情が非常に柔らかく笑顔が多いです。年間何十と学校を訪問しますので、私の経験則も間違いないように思います。教えてもらうことから始ってもいいけれども、それに終始すると決めつける必要もありません。

大阪府のある市の取り組みの様子です。子どもたちは地域の伝統文化の祭りの時の過ごし方やその意義を地域の人に聞き取りました。聞き取りの成果を昔だったら壁新聞だったのでしょうが、この時はコンピュータでまとめました。音声や写真も入っています。このようにマルチメディアにしたことのよさはというと、非常に印象深く発表できるということもありますが、この写真のように「コンピュータはこのようにして使うのですよ」と、地域の人にその使い方を子どもが教えてあげられるということです。

先ほど皆さんの中でもコンピュータが苦手な人は、子どもと一緒に学んでいけばいいという提案もしましたが、一つの道具を媒介にして人と人が結ばれていくということはあると思います。これも、一つの往復作用だと思います。

このような往復作用があるかどうかということはきちんと評価をしないといけないと思います。ある学校の例を紹介したいと思います。高齢者が多い地域に住んでいる学校の5年生が、福祉学習としてかなり丁寧な交流を企画推進しています。年間5回ほど交流します。最初は、高齢者の施設に出かけて行って、子どもたちがその様子を見てきます。このような高齢者がいる実態なら、こんな催しをすれば喜んでもらえるかなと考えてやってみたり、最後は学校にお呼びしたりして、学校の一角を高齢者のための一日ディサービスセンターの形にしてもてなしをするという所まで活動を進めていきます。その際、子どもたちは福祉の考え方を社会福祉協議会の方から学習して取り組んでいるのですが、そういった実践活動が続けていくと、子どもたちは何時にお茶を出すかというようにだんだん狭いところに入り込みがちになります。その時に仕事で福祉関係に従事している方が、学校に来てくれて子どもたちの企画を適切に評価していました。「皆さんがやっていることはいいことなのですが、本当に高齢者の方に喜んでいただけますか。喜んでもらおうと緻密なスケジュールを立てると高齢者はしんどくなりますよ。皆さんがやっていることはいいことなのですが、まだ一人よがりなところがありますね」というようにきり返してくれました。すでに皆さんの地域で始まっている子どもたちと地域の方とが協力して進めていく取り組みはどうでしょうか。子どもたちが一生懸命になっている姿に胸を打たれるから、そのままやらしてやろうというようになっていませんか。むしろ私は手厳しいくらいでいいと思うのです。もちろんフォローは必要なのですが、この場合もはっきりそれじゃだめだこの方は言っています。しかし、ずばり言われたから、本当に両者にとって実りのある活動や交流にするためにどうしたらよいかを子どもたちは真剣に考えました。今日はコーディネイターの方が多いですから、皆さんも、そうした感覚を抱かれたことがあるかもしれません。子どものことを考えたり教員の立場のことを考えたりすると、ちょっとこれではと思われても、口を閉ざしてしまいがちですね。けれども、最初に出した原則のようにもめてもいいわけですから、本当の意味でいい交流になるようにどんどん口をはさんでいただきたいと思います。

こうしてはいけないという例を出したいと思います。大阪市の近隣の市です。2時間続けて行われた総合的な学習で、地域の環境について子どもたちが調べたことをまとめて発表するという場面でした。左側の写真の方は市役所の環境課の方ですが、評価者として環境の専門家の立場から子どもたちの発表を評価しているところです。保護者の方、地域の方も子どもたちが調べたことの内容を聞き取って、話をする機会がありました。90分の授業ですが、10分の休憩を入れると100分の授業となったのですが、真ん中の写真の地域の方がコメントできた時間はどれくらいだったと思いますか。皆さんだったらどのくらいお話されたいですか。学校の先生が来ておられると思いますが、皆さんだったらどのくらいの時間をこの方々に差し上げますか。5年生の授業です。3クラスありますので、グループの数はとても多かったです。3ヶ所に分かれて発表会をしているのですが、子どもの発表に結構時間がかかりました。実は3分間だったのです。90分間くらい子どもの発表が続き、7分くらい市役所の方のお話があり、残されたのは3分だけでした。市役所の方は見事にコメントをされておられました。地域の方は「家庭の主婦という立場からすると、皆さんの調べたことはいいことなのだけれど、やれないことも含んでいる」とすばらしいことを言っておられましたが、子どもたちは発表疲れしていて聞いていない。もっと言うと、この写真の右側の保護者や地域の方は一度も発表の機会がありませんでした。何か言いたかったでしょうね。一番前の男の人の表情にそれがありありと表れています。仕事を休んで来られている

のですから、無理もないと思います。もっと他にやり方はなかったのでしょうか。この時私は授業後、相当強く先生方にリクエストしました。なぜ、すべての子どもたちが発表を順番に前でしなければならぬのか。せっかくこれだけたくさんの方が来られている訳ですから、発表コーナーのようなものを設けて、それぞれに一人とか二人とか地域の方がついて、やりとりすればいいでしょう。発表といえば、あるグループがして他のグループが全部聞いてというような形式にする理由は何ですかと聞くと、何も答えは返ってきませんでした。教科の学習だとそのようなスタイルが当然なのでしょうね。発表会といえばグループごとに順番に話をしていくというスタイルがあたりまえなのでしょう。これは総合的な学習の時間の授業で地域の方と組んで取り組んでいるわけですから、通常の授業のスタイルから離れていいわけだし、離れるべきなのです。学校の先生方には、今私が言ったことができているかどうか自らの取り組みを評価していただきたいし、地域の皆さんにとっては、このような機会に招かれ教師たちと授業を一緒に作る時に、先生方が新しい感覚をお持ちでない時には、提案してみてください。先生方も言われてわかることもあるのです。だから、皆さんから言っただけならば、きっと変わる部分があると思うのです。せっかく地域の方が来ておられる。そして、そこで子どもたちと密で熱い交流ができる素地があるなら、ぜひ実現させましょう。そのためには、総合的な学習の授業づくりでは発想を変えるということが大事ではないでしょうか。

逆によかったのは、京都の小学校です。この学校は何年も環境のことについて、地域・家庭・学校が一体となって取り組みを進めています。発表もこの写真のようにいろいろな発表コーナーを設けて、地域の人がぐるぐる回っていくというポスターセッション形式で取り組んでいました。体育館でずらりとこの写真のように発表を聞く場があって、地域の人もそこでいろいろ目にする事ができますし、その場所で形式張らずに、疑問などを聞き合って意見を述べるということが成立したのです。また、まとめのパネルディスカッションをするのですが、そこでは、子どもの代表、地域の代表、行政の代表が出て意見交換を繰り広げていました。代表だけなのですが、それでも三者の対等な立場がよく現れている図式ではないでしょうか。このような関係性はこの学校が何年間にもわたって一つの川をめぐって、環境の取り組みを学校や地域で繰り広げてきたからこそ芽生えた姿なのです。

逆に残念なケースをあげますと、砂浜クリーン作戦を4年生の子どもたちと地域の婦人会が連帯をして進めていき、すごくきれいになったと好評だったのですが、学校側が翌年度はもう総合的な学習のテーマを変えてしまい、それができなくなってしまうのです。婦人会の盛り上がりどエネルギーは、行き場がなくなってしまったのです。振り返りの会の時はよかったよかったということで、次年度も一緒にやろうということになっていたのに、数ヶ月してもう一度学校に行ってみると、教員チームが変わって学習テーマが変わってしまったのです。どうするのかなと思っていましたら、特活で対応ということできず事なきを得たのですが、やはり続けていけないといい関係も育めませんね。

続けるということに関してもう一つ言いますと、皆さんが学校にいかれて、取り組みをしていく機会はきっと限られると思います。職場に行くより学校に行っているほうが多いという人はいないでしょう。中には、お仕事をもちではなく学校に机を用意してもらってという人がいてもいいのですが、でもそれはどちらかという少ないケースです。そうだとすれば、会えるのを心待ちにしている時に最も充実した結びつきができるように進めていくけれども、会えない時の中継ぎにメディアでつながりを保つというアプローチが重要になってきます。つまり、ネットワークを駆使してくださいということです。中には、会えるのにどうしてメールでやり取りしないといけぬのかと思われる方がいるかもしれませんが、でも、会いたい人とどうしても会えない時に、気持ちを汲み交わすにはそういった手段しかないではありませんか。だから、私は、地域の人と子どもたちがこのような電子的な道具をうまく使って

コミュニケーションを連続させることはむしろいいことだと思っています。それだけでは、バーチャルな世界に埋没してしまうということになるのですが、それが脇役となって本当に大事な取り組みを進める時に出会えてうまく進んでいくのではないのでしょうか。

これは岡山市のある小学校です。地域のNGOのAMDAという国際ボランティア活動を繰り広げている団体の職員の方と子どもたちが出会えたのです。この時、この組織がブラジルの子どもたちを支援しているということを子どもたちは聞き取りました。このあと彼らは、ブラジルの子どもたちにコンピュータを送るための募金活動を進めていき、「今いくら集まりました」、「これくらいの金額で買えるのでしょうか」とメールを入れるのです。「コンピュータを送るだけではだめです」とNPOの方が返信をします。「どうしてですか」と尋ねると、「教員が使えないから使えるようにするための教員研修も必要です」ということをメールで子どもたちに伝えてくれます。このようなやりとりにメディアを使っていました。今、はぐくみネットはどのような状況でしょうか。

同じ学校の中でも、大きい学校であれば教員同士でもなかなか会うことができません。まして地域と学校となればいつも会うわけにはいきません。コミュニケーションは密にとる方がいいですから、対面とオンラインと組み合わせていい関係を続け、それを太いものにしていただきたいと思います。また、そのためには、教育行政側もIT環境の整備などについては、イニシアチブを取らなければならないと思います。人と人の結びつきは、むしろこういう道具に支えられているという発想で対応していただきたいと思います。そういえば、こういったことができるコーディネーター間の交流も密になりますね。今、皆さんが集まるのは、年間数回でしょう。各地域の「はぐくみ」の様子というのは、その時にしか手に入りません。でも、Web上に掲示板を作ったりファイルキャビネットを設けたりすると、それぞれの地域の取り組みが電子的な世界で共有でき、もっと他の地域や他のコーディネーターに学ぶということが盛んになるのではないのでしょうか。この中にそういったことが得意な方がいらっしゃれば、是非ホームページを立ち上げて欲しいと思います。

29、30番では同じことが言いたいので、30番だけ説明します。学校と地域が結びつくということをどういった側面で展開していくかということです。この学校は田舎の学校なので、総合的な学習は地域一点張りです。1・2年生の時にはとにかく出かけて行って地域と体でぶつかってくるということをお大事にしています。体験的な学習です。とにかく行ってみよう、やってみようです。こういった時に地域の人の応援として学校の先生が期待しているのは、安全面が気になりますから、引率での協力をお願いすることになります。中学年になりますと、地域の特色や社会科とも連動して、昔のことが知りたいとか、人々の地域にかける熱き思いが知りたいというようになりますので、情報提供者の役割がクローズアップされてきます。最後に、4年生から6年生にかけてこの学校では、リーダーシップをとるところまではいかないかもしれないけれども、小学生でありながらも社会的実践に取り組みます。そのために、例えば、福祉であれば4回も5回も子どもたちが施設に出かけていたりそちらから来てもらったりということをしします。また、環境であれば地域で環境をよくしようと取り組んでいるNPOの団体と連絡を密にとって活動するという実践をやっています。ここでは地域の人は、素晴らしい先輩、仲間です。先達と言っていいです。教えてもらうという関係性とは少し違って仲間ですから子どもなりにアイデアも出すし、地域の方がやっているいいことに学んでいこうとする姿勢を持っています。総合的な学習とはいろいろなことができますから、この学校は地域と子どもたちとの交わりを積み重ねることによって、本当の意味で地域に生きる子どもを育てることになっていると思います。

大阪市のはぐくみネットに参画している小学校の総合的な学習はこのように整理がついているのでしょうか。この学校はもう何年も取り組んでいるのでこういう形ができているのですが、多くの学校はま

だそうではないわけです。地域と学校との交わりの可能性を多様に考えていただき、今後、学校の先生には交わりの密度をどんどん高めていっていただきたいし、地域の方にはなにができるか考えていただきつつ、学校の先生が段階的、系統的に作り上げようとする総合的な学習のトータルな支援をしていただきたいと思います。

6. さいごに

今日お話ししたいことは以上なのですが、基本精神はコラボレーションです。すでにこの事業では、地域の持ち味をいろいろ活かすという素地が生まれていますから、先生方と地域の方が協力して、これからはぐくみネットの事業を多様かつ大胆に進めていただきたいと思います。そして、その成果を12月25日には教育改革フォーラムで報告していただきますし、2月にはまとめの発表会がありますから、その時には私も参加させていただき、皆さんの取り組みを聞かせていただきたいと思います。ぜひともがんばっていただきたいと思います。今日はありがとうございました。